

Excellent Lady Aki

エクセレント・レディ  
亜紀  
時空超越編

大津清志

## 目次

|      |     |
|------|-----|
| 第1章  | 3   |
| 第2章  | 7   |
| 第3章  | 13  |
| 第4章  | 19  |
| 第5章  | 31  |
| 第6章  | 49  |
| 第7章  | 59  |
| 第8章  | 63  |
| 第9章  | 69  |
| 第10章 | 75  |
| 第11章 | 83  |
| 第12章 | 101 |
| あとがき | 131 |

# 第1章

あの時の最後のミズリイとの交信からもう十年程経つただろうか。

亜紀はいつものように一人息子の純一とテレビなど見ながら自宅で寛いでいた。窓からは綺麗な星も見え美しい大きな満月が実に神秘的で自然が生み出す芸術とばかり見上げていた。すると北の方角から綺麗な流れ星のような光が……。

しかしそれは微妙に、流れ星より遅く、白い尾を真直ぐ引いた少し大きめな閃光を亜紀は見た。「純一、ねえ、あれなんだろう？」亜紀はその方向を指差して言った。

「わあ綺麗な流れ星！」と純一は言った。

その光が地球の大気圏に突入すると大気摩擦で爆発したかのように、それは丁度線香花火が落ちて弾けるようにオレンジ色の光がとび散った。

亜紀はまたその流れ星のような光が勇ましくも美しく、この世が醸し出す大花火にも見えていた。

だが反面思う気持は宇宙船のワープしている時の大気衝撃波もそうなんだと自分の心の中にある科学者としての赴きがロマンチックな乙女心を夢の世界から現実へと引き戻すことに苛立ちさえ感じながら、瞬間的に身震いさえも感じていた。

それは最近太陽系と銀河系に小さいながら今迄見つかっていなかった惑星や衛星などが幾つか見つかかり特に今迄気が付かなかつたが、太陽系を外れたところで、一つの惑星の裏側にもう一つ

の星が隠れて丁度、月の裏側が宇宙周回と共に見えない部分というように影の星が多数あった。

その中でももちろん電波も届かずにいた小さな星に地球とは違う生命体があった形跡の発見もあり、少し前に地球でも大変な話題になったが、その星を亜紀達宇宙連合警察が探査してみると確かに今迄そこに我々地球人と同じように物を作り手を加えて利用する知識のある生命体が出て、ちゃんとその星へ着陸し離陸した跡があり、何かをしていたという跡もあり、それもあり大型の宇宙船で来たという確証もある。

推進力はたぶん電磁力以外に考えられない方法であることを確認したが、その未確認飛行物体とはコンタクト不可能で、もしもミズリイ達なら亜紀の作り上げたエレクトレパシーで通信可能であるので、それはないと思った。

それにより亜紀はまたそれは別の異星人の乗ったUFOが来ていると疑わざるを得なかった……。

やはりこの広大な終点のない無限なる宇宙、我々の住んでいる太陽系などは新星群の小さな集まりの一角で、その周りにはもつと広大な銀河系がある。さらに、違う場所に銀河系などよりもっと大きな大星雲や大星団が無限にあるので、別の星から地球とはどんな星かと宇宙人が探査に来てもおかしくないと考えられてはいたが、ミズリイ達のようにコンタクトが取れば多少なり安心なのだがと、内心想っていた亜紀であった。今まさに相手がどんな考え方を持つ生命体なの

かを知るまでは暢気に宇宙旅行などとは言っては居られない現状に、また、そうなるうとしてい  
るのは間違いないと確信こそしてはいるのだが……。

## 第2章

現在在亜紀の勤務している日本の種子島宇宙センターエアラインが造った宇宙船未来も老朽化して現在はエターナルという名の新型宇宙船に変わり、その宇宙船は未来よりもやや小さな産業型宇宙船に変わり超電磁波反重力とプラズマ電磁力だけを使つての推進力を使いジェット推進力を使用してない超電磁波型新宇宙船に変わつていたのである。

ボデーは外装がほとんど超薄型硬質ソーラーパネルを貼り付けてある大型のカーボンケブラーモノコックタイプで軽量化され、機体自体がさほど重くない蓄電器で、それは内側にある別の太陽電池に接続され、それは艦内の生活必需電力で、充電が途切れても三ヶ月は充電無しで生活できるソーラーエネルギーと進化していたのであった。

また、推進駆動力は超電磁波なので液体電池を入れ替えと液体酸素及び液体水素と窒素のみで後は発電用プルトニウムを積み込めば一年間は補給無しで宇宙航海できる優れたものになつていた。もちろんその積み込む機材と中には食品の飲料水から食べ物も含まれているが、星から星へ移動するには、その星の中心核と行き先の中心核との距離とを計算してその星の中心核へスポットビームレーダーを2方向ずつ照準を当てエターナルの発する電磁波が4方向あるところでクロスを組み、合計8方向ずつバランスを取り今いる星とこれから行く星の間に割つて入りエターナルが超電磁波を発射し【今でいうリニアモーターカーのレーンがない乗り物でレーンの代わりにビームレーダーで、そのビームレーダーレーンに沿つて真直ぐ進む、大きな隕石とかは、シール



ドペールで危険回避し、その時に大きな弓のように弧を画いて飛んで行く】

その時に宇宙船自体が大きなスパークするような光を発し流れ星のような速さで巡航し、肉眼で見てもその行き先の星が見えた時に停止するには、反重力ブレーキを使い数時間後には到着するという優れたもので、これはもうマッハの次元ではないワープ速度に近いスピードで、移動する時は大きな白い閃光と化し長い尾を引き運行中のエターナルは非常に早い流れ星のようにも見える。それは地球が生んだ超高速型宇宙船となっていた。もちろん、エターナルの船体の回りには運行中、船全体強い電磁波を張り巡らせたシールドペール【磁石と磁石の反発の応用いわゆる反重力】にして船体の回りには塵一つ入り込めないようになっていて、小隕石群が来ても直接はぶつからないようになっており丁度川の水の流れて中州にある岩を避ける水流の如しもちろん公園に映画館もありで、【一般の人も地球から月へ、そして火星へ、そしてまた、地球へとシャトル便でエターナルが一日3便毎日循環して運航している】

続いて火星基地も3000人程いて居住区域はMONと同じ星の内容だが居住区域の端から端に監視塔があり、その星の外部に何かあれば、瞬時に探査機が出動するシステムになっている。それは、MONステーションの場合地球からでも十分監視出来る距離にあり、月の何箇所かに通信用の鉄塔が立っていて、そこには監視カメラが設置されている。それが人々の安全を保障しているので今迄も、ほとんど何か遭ったという事はないが、月面及び火星表面には四年に一度流

星群が来て小さなクレーターを作っていく。

それは地球で言えば自然災害で防ぎようのない事なのだが、大きな隕石だけは、そのステーションに配属されている軍の空対空ミサイルで直接MOONステーションへの衝突を避けるのみで、細かい隕石は多少なり降ってくるが、大した影響は今迄に一度もない。それは地球のように地表が固くないのと引力が小さいので、例えば食べ物のケーキの上に何か物を落としたように簡単にクレーターが出来て落ちた物が中のほうに埋もれてしまうので、隕石が落ちてもそれほど衝撃はないからである。大きな隕石の場合はレーダーで探知し、ステーションの出入り口四ヶ所に隕石落下警戒警報が出るシステムになっているので、入り口付近だけ注意し、火星の地下500メートル以下に居れば、生活に支障はまったくないのである。それに地下生活に慣ればデパートの地下にいる感覚で快適な生活が成り立っていた。

かえって地下に慣れてしまうと、地球上の生活が嫌になるかもしれない。ないのは海だけで太陽光の代わりに公園には大きな紫外線ランプと赤外線ランプがいくつか有り、公園に一日居れば嫌でも日焼けしてしまうふうに人間の身体のために人工太陽も備え付けられている。ただ、たまに違う星から来た宇宙船が飛来するが、ミズリイ達の乗っていた型のUFOではなく、俗に言う葉巻型の宇宙船とか、もつと大きなシャンデリアのような形の宇宙船で全体的に七色のグラデーションの光を放ち、探査機が傍に行くとやはり凄いワープスピードで立ち去っていくので交信